

# 動画教材による弾き歌い実技指導の試み — 小学校教諭・保育者をめざす学生を対象に —

## An Attempt to Conduct Practical Playing and Singing Classes through Video Learning Resources -Aimed at Students with the Goal to Become Elementary School Teachers or Educators-

大山 宮和瑚  
OYAMA Miwako

キーワード：ピアノ実技，歌唱，弾き歌い，動画教材，

Keywords : Piano Performance, Singing, Playing and Singing, Video Learning Resource

### 1. はじめに

小学校教諭・保育者をめざす学生にとって，ピアノ演奏技術の修得は必須であると言えよう．養成校でのピアノ実技に関する学修内容は，多くの場合，ピアノ教則本を用いた演奏技術ならびに弾き歌い技術の修得を基本とするが，その授業形態は養成校の方針により実に様々である．特に COVID-19 の流行以降は，それまでの主流であった個人レッスン型，集団レッスン型に加えて，オンデマンド型や同時双方向型などのオンライン授業も一般的になってきた印象である．

筆者は，令和 3（2021）年に A 短期大学に着任し，以降，小学校教諭・保育者をめざす学生の音楽教育に携わってきた．現在，A 短期大学で開講されている音楽関連科目とその学修内容は，表 1 の通りである．

表 1 A 短期大学で開講されている音楽関連科目

	1 年次	2 年次
ピアノ実技を伴う	「器楽演習 I」「器楽演習 II」 ①個人指導によるピアノ実技（教則本） ②動画教材とワンポイントレッスンによる弾き歌い実技（弾き歌い） ※令和 3 年度は「器楽演習 I」の②を集団授業で実施	「器楽演習 III」 「器楽演習 IV」  個人指導によるピアノ実技と弾き歌い実技
	「音楽 II」 ①楽典（音程，コードネーム） ②簡易伴奏の展開	
ピアノ実技を伴わない	「音楽科教育法」 ①学習指導要領 ②歌唱、器楽、音楽づくり、共通事項 ③音楽鑑賞 ④ICT の活用	「こどもと表現 II」 ※オムニバス ・様々な音楽表現を用いた音楽劇
	「音楽 I」 ・楽典 （拍子，音の長さ，音の高さ，反復，発想記号など）  「こどもと表現 I」 ※オムニバス ①こどものうたの変遷 ②リトミック ③手話ソング ほか	

これらの科目のうち、学修内容にピアノ実技を伴う科目は「器楽演習 I～IV」と「音楽 II」「音楽科教育法」の一部、さらに希望免許・資格取得のために全員が履修を求められる科目は「器楽演習 I」「器楽演習 II」である。

本研究の調査対象である令和3(2021)年度はまだ COVID-19 の流行下にあったものの、文部科学省による「令和3年度の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策等に係る留意事項について(周知)」<sup>1)</sup>を鑑み、A短期大学では対面授業を基本としていた。着任初年度、依然続くコロナ禍によって、弾き歌い実技指導は手探りの状態で進めざるを得ず、結果的に、前期開講の「器楽演習 I」と後期開講の「器楽演習 II」では、それぞれ異なる実施形態を取ることとなった。

本稿では、両科目での実施形態の違いについて、その実践内容と授業後アンケートの調査結果を報告するものである。なお、調査結果の使用については、全ての回答者の承諾を得ていることを書き添えておく。

## 2. 実施方法

### 2-1 授業形態

対象科目：「器楽演習 I」「器楽演習 II」

実施期間：「器楽演習 I」令和3年度 4月～7月

「器楽演習 II」令和3年9月～令和4年1月 ※各15回

対象者：A短期大学「器楽演習 I」「器楽演習 II」履修者

授業実施形態：表2の通り

表2 「器楽演習 I」「器楽演習 II」実施形態

学修内容	器楽演習 I		器楽演習 II	
	授業形態	実施教室	授業形態	実施教室
ピアノ教則本 (45分)	個人レッスン	個人練習室で個人練習を行い、レッスン室でレッスンを受講	個人レッスン	ML 教室で個人練習を行い、レッスン室でレッスンを受講
弾き歌い (45分)	集団授業	ML 教室 <sup>注1)</sup>	①オンデマンド ②ワンポイント レッスン	個人練習室

A短期大学では、筆者の着任以前よりピアノ実技は1コマ90分を2分割した入れ替え制で実施しており、45分が個人レッスン、残りの45分が集団授業である。令和3(2021)年度以降の「器楽演習 I」「器楽演習 II」でもこの形式を引き継ぎ、個人レッスンではピアノ教則本を用いたピアノ実技を、集団レッスンでは弾き歌い実技を学修することとしている。原則としてピアノ実技を個人レッスン担当教員が、弾き歌い実技を筆者が担当し、必要があれば、個人レッスン担当教員も弾き歌い実技を指導補助することとした。

弾き歌い実技は、本来であれば歌唱とピアノ伴奏の両方を併せて学修しなければならない。しかしながら、「器楽演習 I」における弾き歌い学修の授業形態は前述のように集団授業型であるため、COVID-19 飛沫感染防止の点から、授業内での歌唱指導は憚られた。

そこで、授業内での指導内容を2点に絞ることにした。一つはピアノ伴奏部分の譜読み、もう一つは、歌唱を含めた練習方法の説明である。受講生は授業での学修内容をふまえ、事後学修として、歌部分も含めて課題曲を仕上げる。そのうえで、次週の個人レッスン時に各担当教員に合格の判断や指導を受けるというサイクルを作り、弾き歌い学修を進めていった。

一方、「器楽演習 II」では、弾き歌い実技学修のための動画教材を作成、配信した。

実施形態を大きく変更した理由は、2つ挙げられる。まず、「器楽演習 I」の実施方法では最終的な仕上がりの判断を個人レッスン担当教員に委ねる格好になり、個々の学生の技

術修得度合いを筆者が把握できなかったため。さらに、COVID-19 の流行が終息しそうになかったためである。

「器楽演習Ⅱ」では、弾き歌い実技の45分間、受講生は個人練習室で課題曲の動画教材を見ながら練習を行うこととした。動画内で指導する練習手順自体は、「器楽演習Ⅰ」と比べてさほど変わりがない。しかしながら、実施教室を個人練習室に移したことで感染対策が講じやすくなり、授業内での歌唱練習が可能となった。さらに、個人巡視指導を併せることによって、学生それぞれの悩みに合わせたフォローアップが叶った。

## 2-2 使用教材

「器楽演習Ⅰ」「器楽演習Ⅱ」では、筆者が作成した課題曲プリントを使用教材とした。課題曲は、両科目の弾き歌い必修曲である。これは技術的な意味合いから修得することを推奨する最低限のレパートリーで、当該年度は、両科目10曲ずつを必修曲に設定した。課題曲が弾けるようになったと教員が認めた学生については、必修曲以外の曲を自由に学修する。なお、当該年度の「器楽演習Ⅰ」「器楽演習Ⅱ」必修曲は、次の通りである(表3)。

表3 令和3年度「器楽演習Ⅰ」「器楽演習Ⅱ」必修曲一覧

器楽演習Ⅰ (全10曲)	ちようちよう、ぶんぶんぶん、かえるのうた、ちゅーりっぷ、てをたたきましよう、むすんでひらいて、大きなくりの木の下で、あくしゅでこんにちは、おかたづけ、おかえりのうた
器楽演習Ⅱ (全10曲)	あさのうた、かたつむり、おべんとう、さよならのうた、なべなべそこぬけ、かごめかごめ、やまのおんがくか、ありさんのおはなし、ハッピーバースデー、思い出のアルバム

プリントの作成には、筆者が共同研究者として開発に携わった教本「わかりやすい！学びやすい！コードでかんたん！保育のうた」<sup>2)</sup>を参照した。本書には弾き歌いの楽譜と楽典ワークの両方が盛り込まれており、ピアノ伴奏部分をコード奏で学修する。「器楽演習Ⅱ」では、プリントに加え、授業用に作成したオンデマンド動画教材を使用した。

## 2-3 弾き歌い課題曲の練習手順

前述の「わかりやすい！学びやすい！コードでかんたん！保育のうた」<sup>2)</sup>を用いたピアノ指導は、高崎によって、すでに一定の学修効果が実証されている<sup>3)</sup>。このため、練習手順についてもこの教材での推奨手順を基本とし、推奨には無いものの、筆者が以前より取り入れたいと思っていたステップ3-②と4-①を新たに加えることとした(図1)。

この2種の手順を加えた理由としては、片手ずつ弾けるようになって、両手を合わせて歌を付ける段階で頓挫してしまうケースが少なくないためである。特にステップ3-②については、ピアノ学習者がフーガなどの多声部で書かれた作品を学ぶときに効果的な練習法として用いられるが、これを一連の手順の中に取り入れることで、両手を合わせて弾いた時の躓きを解消することができる

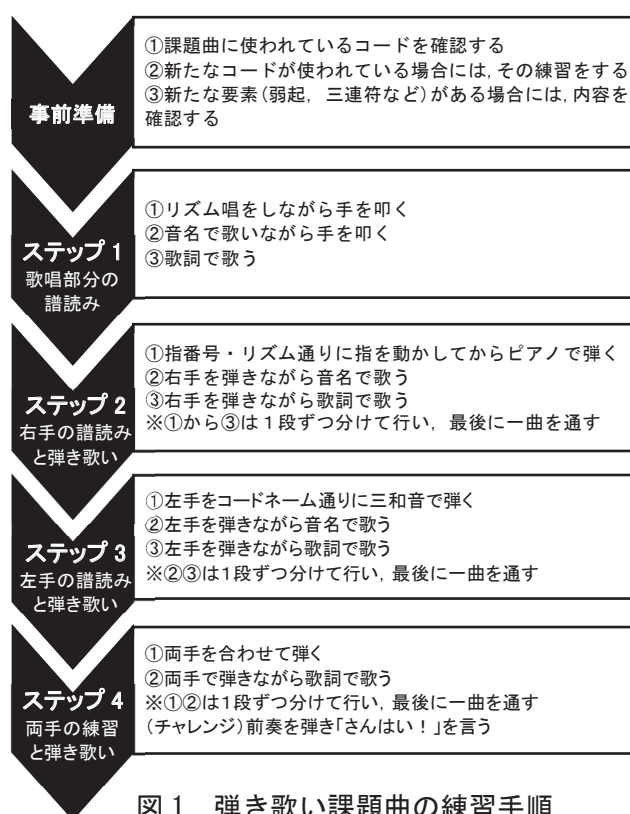


図1 弾き歌い課題曲の練習手順

と考えた。

この練習手順は、資料として「器楽演習Ⅰ」の Google Classroom に掲示するとともに、第2回授業で詳細な説明を行った。

「器楽演習Ⅰ」では、課題曲の学修に入る前に、ピアノの座り方、手の構え方など、演奏時の基本姿勢の確認に加え、課題曲で使用されているコードの練習を行う。その後、図1の練習手順のうち歌唱部分を省いた、ステップ1-①(講師のリズム唱に合わせて手を叩く)、ステップ2-①、ステップ3-①を学修する。加えて、マスクの着用、換気、パーテーションを設置したうえで最前列から2メートル以上離れるなどの感染防止策を講じながら、デモ演奏としてステップ1-②、1-③、4-①、4-②を講師が行った。さらに、事後学修として残りのステップ中で特に注意する部分やプラスして行うと良い練習法がある場合には、最後に口頭で説明を行った。

授業中の学修では、まず講師が模範奏をし、続いて受講生が一斉に演奏する。一つの練習を何度か繰り返し、ある程度形がついた後に個人練習する時間を取って、机間巡視とフォローアップを行った。

一方、「器楽演習Ⅱ」では、全てのステップを図1の練習手順通りに動画に収め、受講生が動画を見ながら、順を追って練習を進められるようにした。各ステップ終了後には、押さえておくべきポイントを文字で示すとともに再度説明する。新しいコードネームの修得や楽典の復習が必要な場合には、練習方法やその内容について、動画の最初に収録した。

作成した動画教材は授業前週に Google Classroom で配信し、事前あるいは事後学修にも活用できるようにした。

#### 2-4 動画教材の作成方法

「器楽演習Ⅱ」で使用した動画教材は、Office Power Point を使って作成し、長さは約20～25分に収めるよう心掛けた。「さよならのうた」や「思い出のアルバム」など、比較的長い楽曲については、動画を分け、二週にわたって配信した。

ステップ2以降の練習手順では、演奏手順ごとの模範演奏とともに、演奏箇所を画面下部に載せ込んでいる。模範演奏の録画には iPhone の動画撮影機能を使用し、手の動きが分かりやすいように鍵盤の真上から手元を映した。指をくぐらせる箇所、手を広げて演奏する必要がある箇所、調号の付いた音などは、動画の中で口頭説明するとともに、画面下部の楽譜にマークして示した(図2)。

図2 動画内の模範演奏例(「やまのおんがくか」より)



### 3. 授業後アンケートによる結果

#### 3-1 アンケート項目

調査は「器楽演習 I」と「器楽演習 II」の受講生を対象とし、「器楽演習 II」で使用した動画教材における有効性の検証を目的に実施した。調査方法は、Google Forms でのアンケートである。有効回答数は 59、検証したアンケート項目は次の通りである。

- (1) 入学時のピアノ学習歴を教えてください（選択）
- (2) 弾き歌いの授業形態について、どちらの実施方法が学修効果が高かったと思いますか？（選択）
- (3) 集団授業の良かった点を記述してください（自由記述）
- (4) 動画配信の良かった点を記述してください（自由記述）
- (5) あなたは、配信された動画を事前事後学修にも活用しましたか？（選択）
- (6) 配信された動画は、弾き歌いの技術向上に役立ったと思いますか？（選択）
- (7) 器楽演習 II では、弾き歌い動画配信とともに個人練習中のワンポイント指導を実施しました（大山による個人練習室での指導）。このワンポイント指導は、動画配信による授業の補助として役立ったと思いますか？（選択）
- (8) 配信された動画の長さはどうでしたか？

#### 3-2 入学時のピアノ学習歴（選択）

未経験（楽譜が読めない）19名、未経験（ト音記号は読める）19名、バイエル学修経験あり（ト音記号のみ）6名、バイエル学修経験あり（ヘ音記号が分かる）5名、ブルクミュラー・ソナチネ学修経験あり10名で、約6割がピアノ学習未経験者であった（図3）。

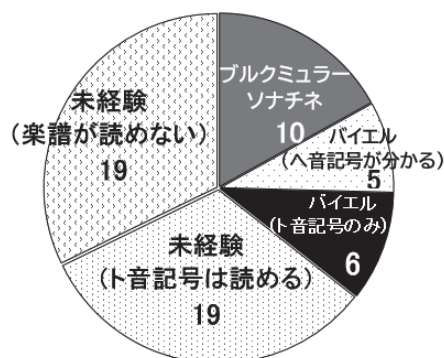


図3 ピアノ学習歴

#### 3-2 弾き歌い実技について、学修効果が高いと思う授業形態（選択）

動画配信46名、集団授業13名で、動画教材による実施方法がより多くの学生から支持された（図4）。

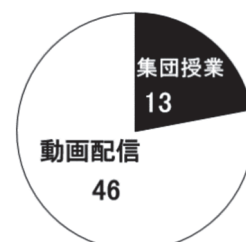


図4 学修効果

#### 3-3 集団授業の良かった点（自由記述）

33の回答が得られた。そのうち最も多いコメントは「分からない時、すぐ教員に質問ができる」という趣旨のもので、13件の回答があった。そのほか「みんなでできる楽しさ」「みんな同じペースで進める」「みんなの状況がよく見えるので自分も頑張ろうと思えた」「全員で弾くので少々間違えても恥ずかしくない」などの意見が挙げられた。

#### 3-4 動画配信の良かった点（自由記述）

48の回答が得られた。そのうち最も多いコメントは「自分のペースで進められる」という趣旨のもので、32件の回答があった。そのほか「わからないところを繰り返し見て確認し練習することができる」「人目が気にならない」「事前学修が可能になった」「復習がしやすい」などの意見が挙げられた。

#### 3-5 配信された動画教材を事前事後学修にも活用したか（選択）

活用した53名、活用しなかった6名で、概ねの学生が動画を事前事後学修に活用したようである（図5）。

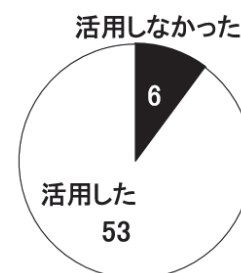


図5 動画の活用

#### 3-6 動画教材は弾き歌いの技術向上に役立ったか（選択）

そう思う56名、ややそう思う3名、そう思わない0名で、全員が技術向上に役立ったと回答した（図6）。

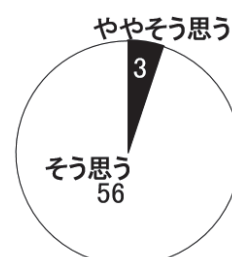


図6 動画の学修効果

### 3-7 教員によるワンポイントレッスンは、動画教材の補助として役立ったか（選択）

そう思う 51名、ややそう思う 7名、どちらかというと思わない 1名、そう思わない 0名で、概ねほとんどの学生が何らかの役に立ったと回答した（図7）。

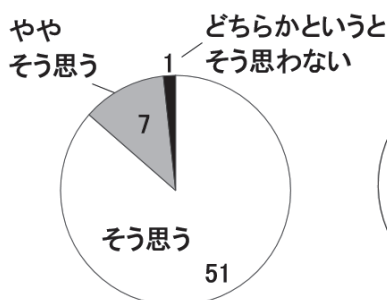


図7 ワンポイント  
レッスン

### 3-8 動画教材の長さはどうだったか（選択）

短い 0名、ちょうどいい 50名、長い 9名で、多数の生徒が適当であると回答した（図8）。

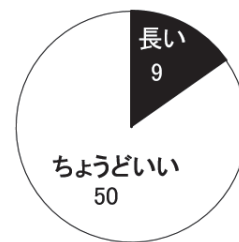


図8 動画の長さは  
どうだったか

## 4. 考察

調査対象の学年は、「3-1 入学時のピアノ学習歴」の結果にみられるように、全体の6割が入学時ピアノ初心者である。習熟度合いが様々な中で、「器楽演習II」開始当初は、弾き歌い実技の動画教材が実際の技術修得にどの程度結びつくのか不安があった。しかしながら、「3-2 弾き歌い実技について、学修効果が高いと思う授業形態」では8割近くが動画教材を選択しており、「3-6 動画教材は弾き歌いの技術向上に役立ったか」の結果は、回答者全員が技術向上を実感していることを示している。加えて、「3-5 配信された動画教材を事前事後学修にも利用したか」では、9割近くが利用したと回答している。これらの結果からは、動画教材の使用は有効な指導法の一つだと結論付けることができるだろう。

ただし、効率の良い技術向上のためには、演奏に対する指導者の客観的な意見が必要である。今回はワンポイントレッスンという形で補助を行い、「3-7 教員によるワンポイントレッスンは、動画教材の補助として役立ったか」では、概ね全員が役立ったと回答した。しかしながら、実際には、限られた時間の中で全員に等しくワンポイントレッスンを行うことはかなり困難であった。また、「3-3 集団授業の良かった点」の回答に見られるように、学生が指導者の意見を求めたい時に、リアルタイムでの指導が叶わないという問題点もある。今後は、補助の方法についても検討していきたい。

最後に、本研究の調査対象ではないものの、個人レッスン担当の非常勤講師からも実施方法についての意見をいただいたので、ここに記しておきたい。当該授業の Google Classroom には非常勤講師も教師役として入り、課題や資料などを見ることができる。このため、非常勤講師からは「弾き歌い実技部分の指導内容や方法を見ることができ、指導の際の参考になった」との意見をいただいた。講師間での指導法の共有という点で動画教材がポジティブな役割を果たし、両者の負担軽減に繋がったのは、嬉しい誤算であった。

## 5. 今後の課題

本来、実技学修は対面が基本である。しかしながら、COVID-19 流行下においては、特に飛沫感染の可能性を伴う弾き歌い実技の指導について、その環境や方法に配慮が求められてきた。本研究は、集団授業、動画教材とワンポイントレッスンを併せたオンデマンド授業の両方を実施したうえで調査したものであるが、その結果からは、オンデマンド授業でも集団授業に遜色のない学修効果と満足度が得られることが分かった。

また、オンデマンド授業用に作成した動画は学生の事前事後学修にも役立っており、COVID-19 終息後の有効性をも感じさせられる。今後、「器楽演習I」「器楽演習II」とともにオンデマンドで実施した場合についても、さらなる調査と検証を行いたい。

動画教材には様々な利点があり、今後も上手く活用していきたい指導法の一つといえる。しかしながら、学生の自由記述にもある通り、「みんなでできる楽しさ」など、仲間と共に学ぶ集団授業でしか得られない喜びがあるのも、また事実である。

COVID-19 の流行以降、音楽の中でも、とりわけ歌唱・管楽器演奏などの息を使う分野

は、厳しい制約を受けてきた。マンツーマン型のレッスンでは Zoom や Google Meet などの会議用アプリケーションが有効だが、時差が生じるうえ、アプリケーションによっては双方が同時に音を出すことができない。現在は YAMAHA の SYNCROOM に見られるように、時差がほとんど無く、リアルタイムでの合奏が叶うアプリケーションも配信されており、同時に奏でる楽しさを目指すならば、こういったアプリケーションを集団授業の代替として使用することも一つの案であろう。しかし、同時双方向型のアプリケーションを使用する場合には、恵まれたインターネット環境が絶対条件となる。

事前にダウンロードができ、いつでも視聴可能な動画教材は、手軽だと言える。この教材の良さを生かしつつ、受講者が一体感を感じられる授業を目指して、今後も工夫を重ねていきたい。

### 注釈

注 1) 電子ピアノが 20 台設置されている音楽教室である。

### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「令和 3 年度の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策等に係る留意事項について（周知）」、[https://www.mext.go.jp/content/20210305-mxt\\_kouhou01-000004520-02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210305-mxt_kouhou01-000004520-02.pdf) (2022.11.18)
- 2) 高崎展好編，大山宮和瑚 共同研究：「わかりやすい！学びやすい！コードでかんたん！保育のうた」，環太平洋大学次世代教育学部子ども発達学科（2019）
- 3) 高崎展好：「保育者養成におけるグループレッスン指導のためのピアノ弾き歌い教材開発：授業実践結果から見る開発教材の有効性」、『環太平洋大学研究紀要』，16， pp.7-16 (2020)